

岩部浩三先生に捧ぐ

岩部浩三先生は、1958年に広島県福山市にお生まれになった。1977年に広島大学教育学部附属福山高校をご卒業後、筑波大学第一学群に入学され、1981年に人文学類英語学専攻をご卒業後、筑波大学大学院文芸・言語研究科言語学専攻（英語学主専攻）に進学された。1985年4月に山口大学教養部英語科助手として赴任され、翌年、講師に昇任された。そして、文部省在外研究出張で、1988年10月から10ヶ月間、マサチューセッツ大学アマースト校言語学科で研究に従事された。帰国後の1989年10月には、人文学部に異動され、助教授を経て、2003年1月に教授となられた。その後は、大学教育センター長、アドミッションセンター長などの要職を歴任され、このたび定年ご退職を迎えることとなった。

岩部先生の数ある功績の中で最たるものは、やはり、2006年から約6年間にわたってお務めになった大学教育センター長（大学教育機構副機構長を併任）時代の共通教育の大改革である。豊富なアイデアと強いリーダーシップによって、年々減る一方の限られた運営経費の中で、いかに授業を改革・改善していくかに腐心された。特に、英語教育改革については、共通教育全体の改革に先立って助教授時代から取り組み、TOEICを導入した英語の共通シラバス・共通テキストによる英語の授業は、全国の大学から注目を集め、講演依頼や視察希望が絶えなかった。さらに、2015年から6年間務められたアドミッションセンター長（副機構長を併任）時代には、いわゆる大学入試センター試験から大学入学共通テストへの変革や、英語民間試験の導入の是非など、多くの難題に責任者として対処してこられた。はたで見えて、「本当にご苦労さまです」であった。

研究面においては、岩部先生がもっとも力を入れられたのは、いわゆる総称文（例えば「サメは人を襲う」のような文）の研究である。総称文は、個別性は無視して、あるものに当てはまりそうな特徴を簡潔に述べて一般化するものである。この一見単純そうな文には、実は、たくさんの謎が含まれており、本気で取り組みれば取り組むほど、うまく説明できない点が溢れ出してくる厄介な面がある。多くの学者が挑戦してきたが、なかなか完全には説明できていないテーマ・トピックなのである。この単純そうに見えながらも、混沌とした総称文の世界を、岩部先生は、簡明直截な原理で捉え直そうとさ

れてきたのである。まさに、“What is true is simple.”という科学研究の基本精神に則った研究姿勢であった。

また、個人としての研究だけでなく、共同研究においてもリーダーシップを発揮され、例えば、科研費による研究の代表者として8名の研究分担者をまとめたり、山口大学研究推進体プロジェクト「言語と時間」の代表者を務めたりもされた。

さらには、英語部会のメンバーたちと協力して、『英語基礎』（開拓社）という英語の基本的な文法を教えるための教科書を率先して作成され、英語の苦手な学生たちへの教育に貢献された。

教育と言えば、岩部先生は、教室での（脱線気味な）話が面白いことで有名であり、学生たちの中に「岩部先生の話が面白いので、私は『意味論は面白い』と勘違いをしてしまい、意味論で卒論を書くことにしたら、岩部先生のような上手な一般化がまったくできず、苦勞しました」と褒めことは混じりの苦い経験を語る者もいた。

さらに、岩部先生は、なんといっても多趣味でいらっしゃる。そして、趣味にも手を抜かず、何事もとことん極めようとされる。例えば、大学院時代から始められたテニスは、今もテニススクールに通われており、市のテニス大会に出場するからには（シニアの部で）優勝を目指す意気込みである。釣りも大好きで、寒さをもものともせず、夜中から釣りに出かけ、たくさん魚を釣って帰り、ご自分で捌いて料理をされる。また、フルートやサクソといった管楽器の演奏がとてもお上手で、学生たちとのバーベキューやクリスマス会や謝恩会の席で、よく演奏してこられた。そして、「1年に1つずつ新しい楽器を覚える」ということを目標に掲げ、ヤマハ音楽教室に通われている。

このように多趣味な岩部先生は、ご退職後も、お暇になるどころか、なさりたいことがありすぎて、大忙しの状態である。これからのますますのご多幸とご活躍を一同祈念申し上げます。

編者